

臨床工学技士の術中麻酔関連補助業務に関する FAQ

【総論】

臨床工学技士は、生命維持管理装置に関する高度な専門性を有し、周術期医療において重要な役割を担う専門職である。

本 FAQ は、術中麻酔関連補助業務における安全の確保と多職種連携の推進を両立することを目的として、役割の範囲と運用上の留意点を示すものである。

Q1. 臨床工学技士が術中麻酔関連補助業務を行う際、個別の同意は必要か？

臨床工学技士による術中麻酔関連補助業務は、麻酔科医の監視下（同室）において、具体的指示のもとで実施されることを前提とする。

これらの業務は患者の呼吸・循環・麻酔深度に関わるため、患者にはその内容を知る権利がある。

そのため、術前説明において、包括的説明と不同意の機会の確保を行うことを推奨する。個別同意の要否や方法については、各施設の運用および院内規定に基づき判断する。

Q2. 臨床工学技士の術中麻酔関連補助業務時には、麻酔科医の同室が必要か？

術中麻酔管理は、患者の全身状態を継続的に評価し、即時に対応する必要がある医療行為である。

したがって、麻酔科医の同室による監視のもとで実施されることが原則である。臨床工学技士の関与は、麻酔科医の代替ではなく、モニタリング体制の強化および麻酔管理の質向上に資する補助的役割である。

Q3. 臨床工学技士は術中の薬剤投与を行うことができるか？

臨床工学技士は、医師の具体的指示のもと、生命維持管理装置を介した操作として薬剤投与に関与する場合がある。

一方で、麻酔関連薬剤の投与は患者の全身状態に重大な影響を及ぼすため、医学的判断を伴う行為であり、麻酔科医が実施すべきものである。

そのため、現時点では静脈注射による薬剤の直接投与（ワンショット投与）は行わないこととする。

なお、機器設定や投与補助などにおいては重要な役割を担う。
※将来的には、教育・認定制度の整備を前提として検討される可能性がある。

Q4. 臨床工学技士は気化器の操作（吸入麻酔薬投与）を行うことができるか？

吸入麻酔薬は循環・呼吸に重大な影響を及ぼすため、その投与は高度な医学的判断を要する。

現行制度において、気化器の操作は臨床工学技士の業務範囲外であり、実施することはできない。

一方で、麻酔器や人工呼吸器の管理・準備・監視などにおいて重要な役割を担う。

Q5. 臨床工学技士にどのような業務を任せられることができるか？

臨床工学技士は、以下の領域において専門性を発揮することが期待される：

- 麻酔器・人工呼吸器の準備および管理
- 機器設定の補助（具体的指示に基づく）
- モニター機器の管理・記録
- 医療機器トラブルへの対応

※位置づけ：

「機器および手順に関する専門職」として麻酔管理を支える役割

Q6. 臨床工学技士の関与により、麻酔科医が手術室を離れることは可能になるか？

臨床工学技士の関与の有無にかかわらず、麻酔管理中は患者状態の継続的評価が必要であるため、麻酔科医が手術室を離れることは原則として困難である。

臨床工学技士の関与は、麻酔科医の業務負担を軽減し、より安全で質の高い麻酔管理を実現することを目的とする。

Q7. 先進的施設において、より広範な業務を臨床工学技士が担っている場合はどのように考えるべきか？

一部の施設においては、臨床工学技士の関与を拡大した取り組みが行われている。

これらは各施設の

- ・教育体制
- ・管理体制
- ・責任体制

のもとで実施されているものであり、「一般的に無条件に適用・拡大されるべきものではない」業務拡大にあたっては、法令遵守および医療安全の確保が最優先である。

Q8. 今後、臨床工学技士の役割は拡大していくのか？

周術期医療における多職種連携の重要性は今後さらに高まると考えられる。

日本麻酔科学会は、
教育体制の整備
認定制度の検討
安全性の検証

を通じて、臨床工学技士の関与のあり方について段階的に検討していく。

Q9. 術中麻酔関連補助業務の範囲が無制限に拡大することを防ぐためには、どのように管理すべきか？

術中麻酔関連補助業務の範囲は、無制限に拡大されるべきものではなく、法令および本指針の範囲内で適切に管理される必要がある。

■ 重要な原則

術中麻酔管理における業務の割り当ておよび指示は、麻酔科医の専門的判断と責任のもとに行われる。

■ 麻酔科医に求められる役割

麻酔科医は、

- ・ 各職種の能力および教育背景を踏まえた業務配分
- ・ 明確な指示と監督
- ・ 不適切な業務拡大の防止

を行う責任を有する。

■ 学会の考え方

日本麻酔科学会は、

「多職種連携の推進」と「医療安全の確保」は両立すべきものであり、業務のあり方は、各職種の専門性を尊重しつつ、麻酔科医の責任のもとで安全に配分されるべきものであると考える。